

彦根市埋蔵文化財調査報告第18集

葛籠南遺跡 第3次調査

— 県中部用水工事に伴う —

平成元年 3 月

彦根市教育委員会

## 序

近年の社会変化の波は生活全般を変えようとしています、とりわけ農業においては、後継者難や国際的な農産物の自由化等、その置かれている環境は厳しいものがあります。この中で、農業近代化のための基盤整備事業による農地の再開発工事も急ピッチで進められており、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査も増加しております。

畔の木が木影を作りゆるやかな曲線で川が流れる農地から、整然と区画された田が並ぶ風景へと変わりつつあります。ふるさとの風景を見てやすらぎを感じるとしたら、その多くは山の緑と田や畑の緑であると思います。人々の生活の結果として蓄積されてきた歴史や文化もまたそれを感じさせるものではないでしょうか。これ等のものが現在の彦根の環境を形作っています。今後、よりよい彦根を造るためにも、機会があるたびに、私達の彦根を形成しているものをとらえなおして新しい意味を持たせて行く作業が必要なのではないでしょうか。そういった意味で、今後とも文化財の調査を進めてまいりたいと考えています。本書が彦根を考える上で何らかの参考になれば幸いです。

最後になりましたが、本調査にご理解とご協力をいただきました彦根県事務所をはじめ多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

平成元年3月

彦根市教育委員会

教育長 北川 治 男

## 例 言

1. 本書は、昭和63年度に実施した県営灌漑排水事業第2号送水路葛籠工区工事に伴う葛籠南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、彦根市葛籠町地先に所在する。
3. 調査は、滋賀県知事稲葉稔と彦根市長井伊直愛の間に締結された委託契約書に基づいて、彦根市教育委員会が実施した。
4. 調査は、次の体制で実施した。

### 彦根市教育委員会

社会教育課長	安沢 進
同課長補佐	尾本吉史
同文化財係長	日夏秀喜
同文化財係技師	本田修平

5. 現地の調査及び整理作業には、原弥助、鈴木千代、大堤須美子、中尾芳雄、出口加寿夫、西村昭三、寺村きみ子、寺村さだ子、寺村まつ、古川久、松林愛子、北川正吉、茶木作次、伏木和子、中嶋容子、大野優子の諸氏が参加した。記して感謝したい。
6. 出土遺物等の資料は、本市教育委員会が保管している。

# 目 次

序

例言

1. はじめに .....	1
2. 調査結果 .....	3
3. まとめ .....	7
4. 出土遺物観察表 .....	8

# 図 版 目 次

図版 1	調査地点と周辺の遺跡 .....	13
図版 2～3	トレンチ配置図 .....	14
図版 4～6	遺構図 .....	16
図版 7	出土遺物実測図 .....	19
図版 8～14	遺構写真 .....	20
図版 15	出土遺物写真 .....	27

# 1. は じ め に

彦根市葛籠町は、彦根市の東南部の甲良町との境を占め、現在は稲作と菊作りの盛んな出圃地帯である。この付近は、国道8号線や旧中山道、また鉄道ではJR西日本東海道本線や東海道新幹線、近江鉄道が通り、日本の東と西を結ぶ幹線が並行して走る交通の要衝となっている。旧中山道は、古代の主要街道である東山道とほぼ重なるものと考えられることから、古代においても陸上交通においては重要な位置を占めていたと思われる。

この付近の遺跡を見れば、西葛籠町には古墳時代後期の群集墳が確認できた葛籠北遺跡があり、甲良町の長畑遺跡では整然と配位された掘立柱建物跡が検出されており奈良時代の地方豪族の居館の可能性が考えられている。また、前述した葛籠北遺跡においても奈良時代以降と考えられる掘立柱建物跡群が検出できており、この時期の集落跡が甲良町においても数例調査されている。この付近での調査例として一番早い時期のものは、南川瀬南遺跡で確認した刻目凸帯文を持つ縄文時代晩期の土器であり、古くはこの時代まで人間の活動を遡ることができるが、大規模な集落が形成されるのは古墳時代後期以降であると考えられ、扇状地の開発が進んで現在の様な風景になったのは奈良時代以降であると思われる。以上の様な歴史的な経過の中で、古代から中世における東山道、近世における中山道は、本来の道の機能として人や文物の往来だけでなく、文化の様な無形のものも交流しており葛籠町の形成に大きく影響をあたえたものと考えられる。

葛籠南遺跡は、今回の調査までに河瀬土地改良区の実施した団体営ほ場整備事業に伴う事前調査として二度にわたる発掘調査を実施していた。今年度の葛籠町工区は、団体営ほ場整備事業、中部用水事業、また甲良町の地域改善事業に係る市道の拡幅工事と工事予定が幅替していた。今回の発掘調査は、この中部用水事業に伴う事前調査として実施したものである。

中部用水事業は、滋賀県農林部が彦根中部の農業用水を確保するため、琵琶湖の水を逆流して田に送る事から計画された。昭和62年度の段階では県営事業として計画されているとの事であり、用水路予定地には遺跡が数ヶ所入っているが県教育委員会文化財保護課と協議するようと言う事で処理していた。ところが、今年度に入って甲良町の間地域改善事業で市道の拡幅工事を行う事が計画されたため、県営の中部用水工事後に市道改良工事を実施するという工程になった。この様に県営事業中部用水工事だけでなく、

市道の改良工事も調査原因に上ってきたため、葛籠南遺跡の発掘調査を急遽市教育委員会での対応を県土木事務所土地改良課から言ってきた。この時点で中部用水工事のための入札がすんでおり、入札条件に試掘調査費用の重機が入っているから、早急に試掘調査をしてほしいとの事であったが、当市教育委員会との調査についての協議はなかった。このため、本市農政課、県土木土地改良課、県教育委員会文化財保護課と四者で7月7日に試掘調査等について協議した。協議の結果、工事場所が市道であるとの事で、当市教育委員会が調査を実施する事になったが、ほ場整備、中部用水、市道拡幅の工事日程がつかっており、用水工事を先行させなければ後の工事ができないので早急に実施してほしいとの事であった。ただし契約や予算等クリアしなければならぬ問題が多々あるのですぐに調査を実施するには至らないので、先ず事務手続を行う事とした。

調査依頼は、昭和63年6月22日付滋耕第818号で県農林部長より滋賀県教育委員会教育長あてで提出があり、昭和63年6月24日付滋教委文保第1131号で県教育長名で彦根市教育委員会教育長あてで調査実施依頼があった。その後、前述した様に四者協議や県土木事務所土地改良課との協議をへて、昭和63年8月1日付彦教委社第672号で文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査通知を滋賀県教育委員会に提出した。また委託契約については試掘調査を実施して、遺跡の範囲を確認してから締結することとした。

試掘調査は、昭和63年7月22、23の両日に実施し、工事予定地区に計19ヶ所の試掘トレンチを設定して調査した。この結果、2ヶ所で遺物及び遺構を検出したため、本調査を実施することとした。委託契約は、昭和63年9月1日付で滋賀県知事稲葉稔と彦根市長井伊直愛の間で締結した。その後、平成元年1月18日付で委託変更契約書を締結した。

現地における発掘調査は、昭和63年9月7日から同年9月29日まで実施して、その後、資料の整理作業を行い平成元年3月31日をもって全ての事業を完了した。

## 2. 調査結果

試掘調査では、2・5トレンチで遺構及び遺物の出土を確認したため、この結果に基づいてトレンチを設定した。中部用水の配管工事は、遺跡が確認できた地点以外では進んでいたために、本来は中部用水及び道路拡幅工事にかかる幅8mをトレンチ幅にする計画であった。しかし、工事用の仮道及び資材置場等のため、幅8m全部を調査する事はできなかった。現地の地形は、上手より下手に向って舌状に微高地が伸び、この微高地と直交する様に葛籠町と並行して道路は通っており、遺構が確認できた所はこの狭小な微高地上である。

地山は、以前には場整備事業に伴って実施した葛籠南遺跡の調査結果と同様に黄褐色粘質土層であった。また、基本的な土層は、耕作土層、第2層灰褐色粘質土層（床土）で第3層は黒灰色粘質土層の包含層になるが、部分的に厚さが変わりほとんど確認できなくなる地点もある。今回の調査地点は道路敷であるため、前記の土層の上に道路用の盛り土が70cmほど乗っていた。

以下で各トレンチで確認できた遺構等について記す。

### —1トレンチ—

長さ28m、幅7mで設定したトレンチで、試掘調査時には径50cmのピットが2ヶ所確認できた地点である。遺構面は東南側が黄褐色粘質土であったが、北西側は礫混土になり、またトレンチ西側は黄褐色の砂質土になる。遺構はピットと竪穴式住居跡であった。

### SH-1

トレンチ中央部の南側で検出できたものでトレンチの関係上約きほどしか調査ができなかった。プランは一辺5.4mの方形を成し、主軸はN-26°-Wであり、住居跡内には径45cm前後のピットが4ヶ所確認できた。この内隅から50cmほどの所にあるものは、ほぼ対称な所にある事から竪穴住居跡の柱穴である事が考えられる。住居跡内の埋土は茶黒色粘質土が入り込んでいたが、遺物は土師器長甕片や須恵器耳等極少量含まれていただけであった。また、埋土中に焼け土等も2ヶ所入っていたが、床面にはついていなかった。

## SH-2

SH-1の北側で、SH-1に切られた形で検出したもので、一応方形プランであるが長辺6mで短辺が4.5mの不整形なプランであり、竪穴住居跡ではない可能性もあるが、ここでは一応竪穴住居跡として報告しておく。この住居跡の北側は、地山が礫混り土層に入っており、非常に検出しにくかった。主軸はN-28°-Wで、SH-1とほぼ同一の方向性を持っている。また、住居跡内のピットは径45cm前後であり、ほぼ対称の位置で確認できた。

埋土は、SH-1と基本的に同様な土質であったが、SH-1のものに比べるとやや灰色がかったものであった。遺物は埋土の中から出土したものであり、土師器長甕片や須恵器坏身片等であり、焼土は住居跡中央部北側で検出できたが、床面には着いていなかった。

## 柱列-1

径50cm前後のピットが1.6mの柱間並び、主軸はN-71°-Eであり、掘立柱建物跡の可能性も考えられるが、現状では確認できなかった。

以上の柱に1トレンチでは竪穴住居跡2棟と柱列を確認したが、北西側が礫混り土層になり、南側が黄褐色砂質土層になると言う地山の変化から見れば、この1トレンチの地点は遺構群の北端にあたるものと考えられる。出土遺物は、住居跡内埋土等から極少量出土しただけであるが、ほぼ7世紀前半代のもと思われるあまり時代幅はない。

## -2トレンチ-

1トレンチの西南側はほぼ200mの地点に長さ36mで幅6mの規模で設定したトレンチである。試掘調査時には、ピットを数ヶ所確認していたもので、田の地形から見てほぼ田2枚の微高地に広がっているものと考えられた。

土層は、旧耕作土を第一層にすれば第2層は褐黄色粘質土層が床土になり、第3層は灰黒色粘質土層が包含層になるが、この層はトレンチ両端部で確認できなくなる。トレンチ西南側は、包含層が砂質土層になり、これと地山も対応して行き、トレンチ西南端では地山が砂層に変っている。地山は基本的に濃褐色黄色粘質土層であった。前述した包含層には平安時代後期と考えられる灰釉陶器や土師器須恵器片等である。検出した遺構は、ピットを中心としたものであり、他に溝や焼土塊も確認している。



以下、検出した各遺構について記す。

#### SD-1

トレンチ北東端で検出したもので幅1mで深さ40cmの逆台型状を成し、N-50°-Wの方向を向いている。これより北東側は、包含層は切れ、地山も茶色がかった砂質土になり、ほとんど無遺構になるものと思われる。溝内からはほとんど遺物は出土しておらず、わずかに土師器片2点だけであった。

#### SB-1

SD-1から4mのところ、ほぼSD-1に並行している掘立柱建物跡であるが、現状では2間×2間であるが、2間×3間の建物跡と考えられる。ピットは1辺60cmの方形に近いもので、桁行の柱間2mで梁行の柱間2.2mであり、主軸はN-49°-Wである。この柱にSB-1とSD-1はほぼ軸線を同じくしている事から見て同一時期のものと考えていいだろう。

#### SB-2

トレンチのほぼ中央部で検出できたもので現状では1間×1間だけしか確認できていない。ピットは径40cmのものが柱間2.4mを計り、建物の主軸はほぼ磁北を示している。

#### SB-3

トレンチの西南端で検出した建物跡で、現状では2間×3間であるが、3間×3間以上の規模を持つ建物と考えられる。ピットは30cm前後で他の建物跡のもの比べるとやや小さく、柱間も1.8mと2mのものがあり、やや変則的なものであるが、建物の主軸はN-45°-Wを計る。地山は、この建物跡から砂質が強くなり、トレンチ端ではほぼ砂層になっていた。

#### 櫓列

SB-2の南辺と重なって東西に伸びる径40~50cmのピット群が検出できた。現状では柱穴が2mの柱間で4本並んでいるが、SB-2の掘立柱建物跡がこの櫓列の一部であるとすれば柱間1mで7本並んでいた可能性もある。

#### 焼土竪一 1

一辺90cmの方形のプランを持ち深さ20cmのもので、炭および灰が入っており、壁は赤く焼けていたが底は焼けていなかった。炭化物や焼土等以外には遺物は入っていなかった。

#### 焼土竪一 2

焼土竪一 1 から西側に 5 m ほどの所で検出した一辺 1 m の方形プランを持つもので、深さ 50 cm を計る。埋土には炭化物や灰等が入っており、壁四方ともに強い赤焼けであったが、底は焼けていなかった。炭化物や灰、焼土が詰まった埋土の中に土師器の坏が入っていた。

2 トレンチの遺構は、掘立柱建物跡を中心とする遺構群であるが、トレンチ東北部の溝 (SD-1) で区切られているものと考えられる。SD-1 に並行して並ぶピット群も全体的に調査を行えば、その意味を把握する事も可能であろうが、今回の調査ではその性格を把握するに至らなかった。また、遺物の出土も極少量であったが、包含層からの遺物で遺構の年代考えるなら、灰釉等の出土から見て平安時代を中心とするものと考えている。

### 3. ま と め

今回の葛籠南遺跡の発掘調査は、県営中部用水事業葛籠町工区の事前調査として実施したものである。この調査の結果、2ヶ所の遺構群を確認した。1トレンチで検出したのは7世紀代と考えられる竪穴住居跡を中心としたものであり、2トレンチでは掘立柱遺物跡を中心とする遺構群であり、出土遺物が非常に少なくその時代を決定するのは困難であるが現時点では平安時代に入るものと考えている。

葛籠南遺跡の発掘調査は、今回で第3次調査になるのだが、現在まで確認したところを述べれば、扇状地先端部の微高地に奈良時代から平安時代にかけての小規模な遺構群が点在している。この遺構群が集落として同一のものになるのか否かは、遺跡の全容を見なければわからないが、現時点では同一の遺跡と考えている。

地理的にこの付近を見ればほぼ国道8号線が犬上川扇状地の目安になると考えられるが、この扇状地の開発を考える時この付近が現状の様な風景になったのは奈良時代以降になるだろう事は、この時代の集落跡が葛籠北・葛籠南遺跡等1～2kmに1ヶ所づつ確認できている事から考えられる。また、この付近での一番早い時期の遺跡は現時点では南川瀬南遺跡で確認した縄文時代晩期のものであるが、長い時間的な空白がある。また、横地遺跡でも弥生時代後期以降時間的に断続しながら遺跡は続いており、葛籠北遺跡ではその始まりは古墳時代後期である。この様に考えれば、この付近が地形的に安定するのは、後期群集墳の形成から見て古墳時代後期以降になると思われる。後期群集墳の形成と奈良時代以降の集落跡の発展を考え合わせれば、犬上川南岸扇状地の開発過程が明らかになって来るものと思われる。古代における犬上郡の歴史は、まだまだ明確にはなっていないが、今後の調査の進展に期待したい。

## 4. 出土遺物観察表

番号	種類器形	法 量	形 態	調 整	胎土・色調・焼成	備 考
1	須恵器 灰 身	口 径10.1cm	○体部は外傾して開き、受胎部は内傾して立ち上がり端部を丸くおさめる。	○内外面ともに横ナデ調整。	胎土：良好 色調：淡青灰色 焼成：硬	1 T SH-2
2	須恵器 灰 身	口 径12.1cm	*		胎土：良好 色調：淡青灰色 焼成：硬	1 T SH-2
3	須恵器 鉢	口 径 21cm	○体部は内傾して立ち上がり口縁部は強く内傾して端部を面取りして断面三角形をなす。 ○体部上部に二条の凹線を入れる。	○内外面ともに横ナデ調整。	胎土：良好 色調：淡青灰色 焼成：硬	1 T SH-2
4	灰 精 碗	口 径16.7cm	○体部は外傾して立ち上がり口縁部は外寄ぎみに開き、端部を丸くおさめる。	○内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：良好 色調：白灰色 焼成：硬	1 T SH-2
5	灰 精 碗	高台径 8.6cm	○高台は断面半月形をなす。	○高台は張り付け高台で内外面ロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：白灰色 焼成：硬	2 T 包含 刷
6	土師器 甕	口 径12.9cm	○口縁部は外寄して開き端部を上方に強くつまみ出す「く」の字口縁。	○頸部から口縁部にかけては、内外面横ナデ調整。 ○体部は内外面ハケ調整。	胎土：良好 色調：淡黄褐色 焼成：やや軟	1 T SH-2
7	土師器 長 甕	口 径 28cm	*	○口縁部内面はハケ彫後横ナデ調整。 ○外面は横ナデ調整。	胎土：良好 色調：淡黄褐色 焼成：やや硬	1 T SH-2
8	灰 精 碗	高台径 8.2cm	○高台は断面半月形をなし体部は内寄して開く。	○高台は、張り付け高台で内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：白灰色 焼成：硬	2 T 包含 刷

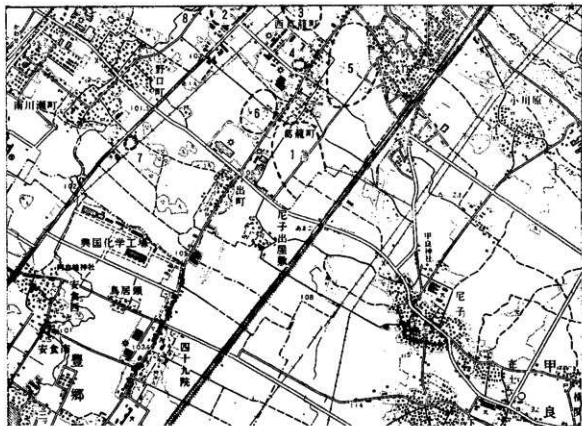
番号	種類	形状	法 量	形 態	調 整	胎土・色調・焼成	備 考
9	灰 釉 碗		高台径 5.6cm	○高台は断面半月形をなし体部は内寄して開く。 ○柄は、体部内面に塗り掛ける。	○高台は張り付け高台で内外面ともにクロクロナデ調整。	胎土：陶灰 色調：白灰色 焼成：硬	2 T 包含層
10	灰 釉 皿		高台径 7.3cm	○高台は断面半月形をなし体部は直線的に開く。 ○柄は体部内面に塗り掛けて重ね焼き痕を残す。	*	胎土：精良 色調：乳白灰色 焼成：硬	2 T P-6
11	土 師 器 甕		高台径14.7cm 器 高13.5cm	○体部は不整形な球形をなし頸部はあまりしならない。 ○口縁部は外寄して開き、端部を上方に引き出して丸くおさめる。	○内外面ともに横ナデ調整で部分的に指のあたりで凹凸ができています。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：硬	2 T P-1内
12	土 師 器 平 杯		口 径14.3cm 器 高 3.3cm	○やや不整形な平底から内寄ぎみに開き、端部を丸くおさめる。 ○器表は部分的に割離しているが円盤りと思われる。 ○器裏がやや焼けている。	○内外面横ナデ調整。	胎土：良好 色調：暗赤色 焼成：やや硬	2 T 焼七層 -2
13	黒土器 甕		口 径14.1cm	○体部は内寄して開き口縁端部を丸くおさめる。 ○内面黒色で握手の作りである。		胎土：良好 色調：茶褐色外面 焼成：やや軟	2 T 包含層



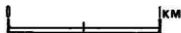
# 版 图



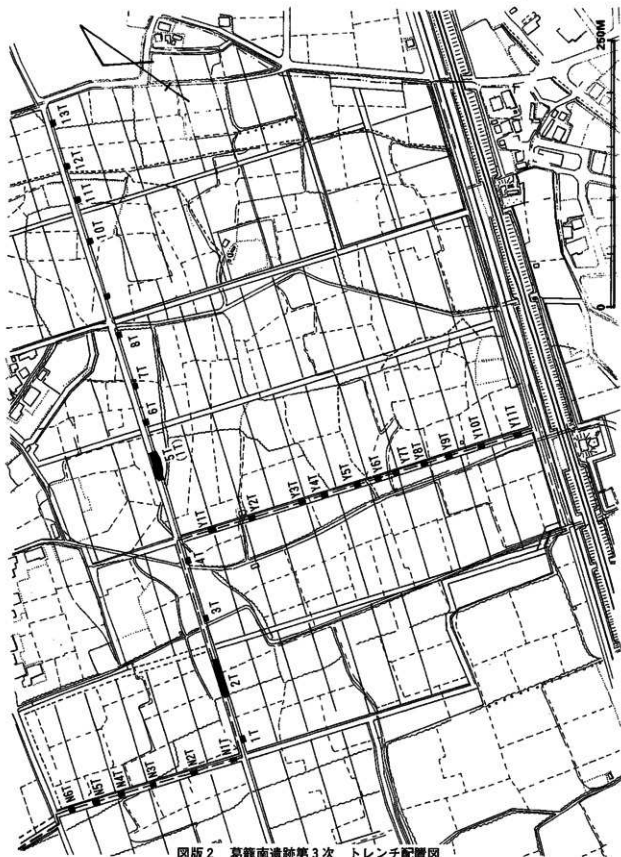




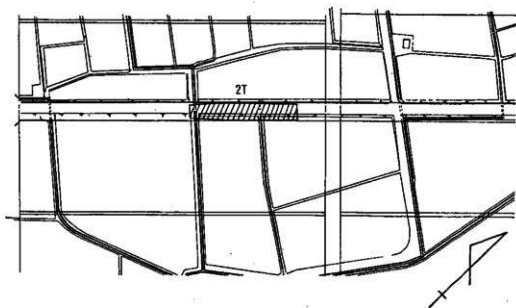
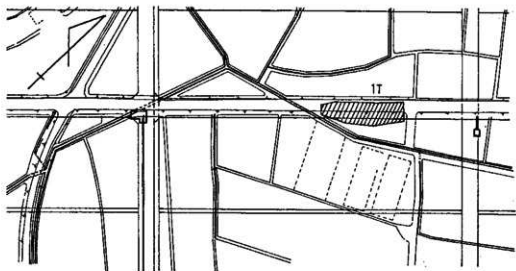
図版1 調査地点と周辺の遺跡



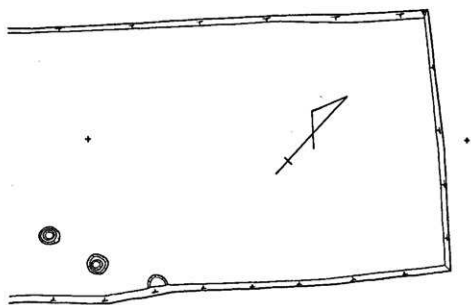
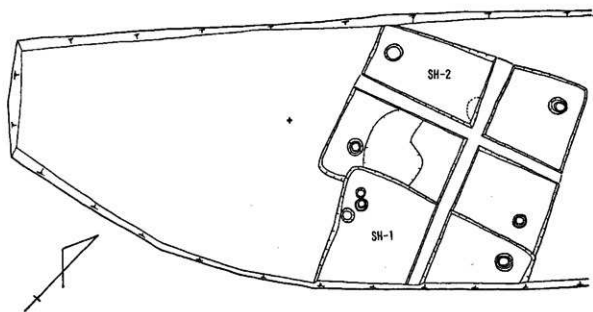
1	葛籠南遺跡(今回調査地)
2	極楽寺遺跡
3	葛籠北遺跡
4	西葛籠遺跡
5	法師南遺跡
6	南川瀬南遺跡
7	南河瀬遺跡
8	天田遺跡



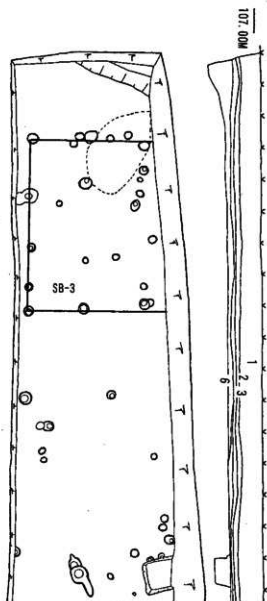
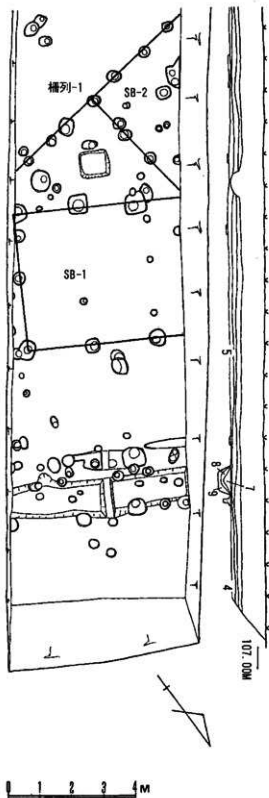
図版2 葛籠南遺跡第3次 トレンチ配置図



図版3 葛籠南遺跡第3次 トレンチ位置図



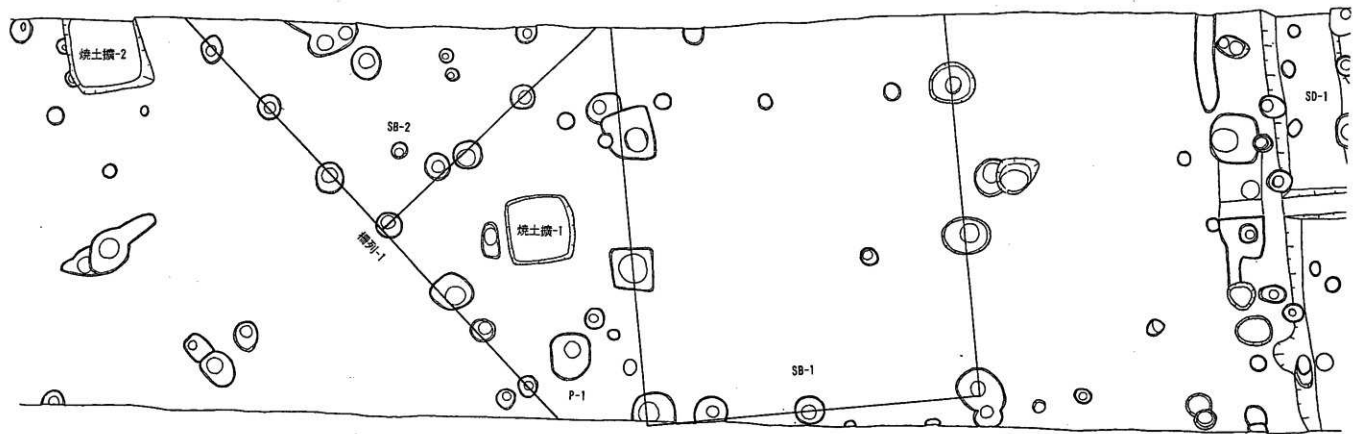
图版4 葛籬南遺跡第3次 1T遺構図



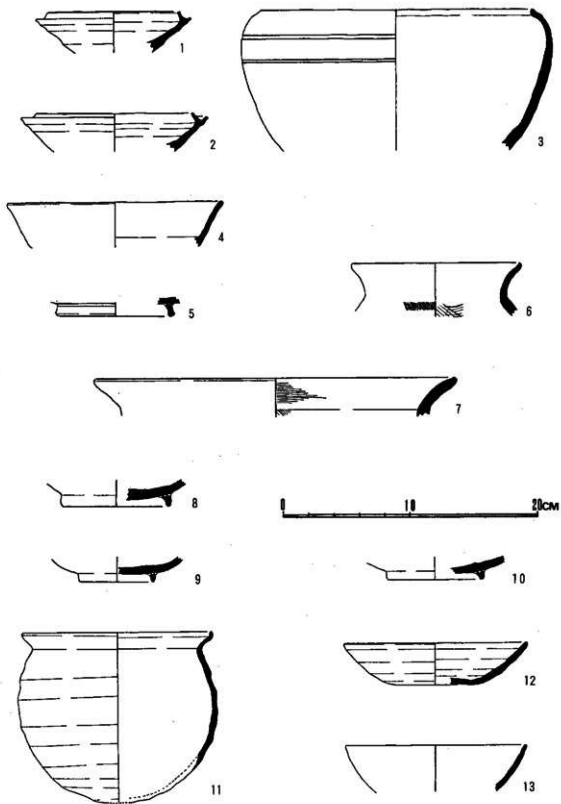
2 T 断面図土色表

1	盛り土層
2	旧耕作土
3	黄褐色粘質土層
4	褐黄色粘質土層
5	灰黑色粘質土層
6	黒灰色砂質土層
7	黒褐色粘質土層
8	黒灰色粘質土層
9	黒灰褐色粘質土層

図版 5 葛籠遺跡第3次 2 T 遺構図



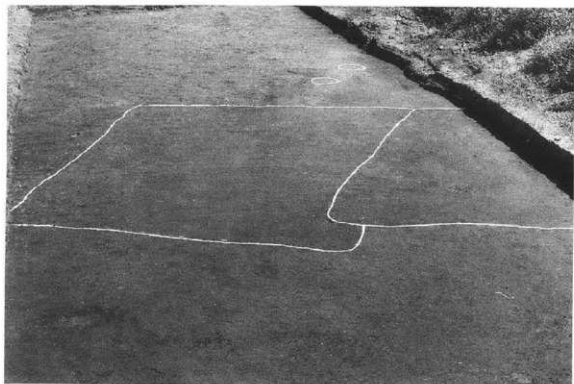
圖版 6 葛龍南遺跡第 3 次 2T 主要遺構圖



图版 7 葛籐南遺跡第 3 次出土遺物実測図

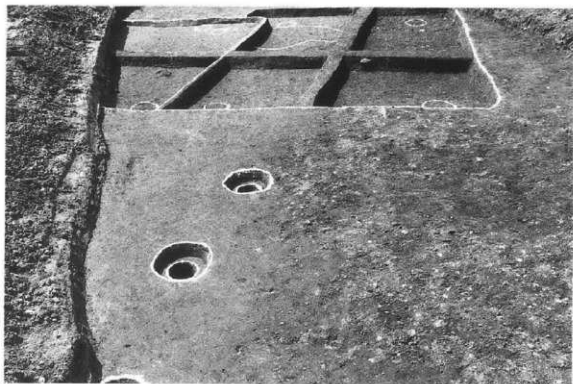


葛籠南遺跡第3次1T遺構検出状況(北から)

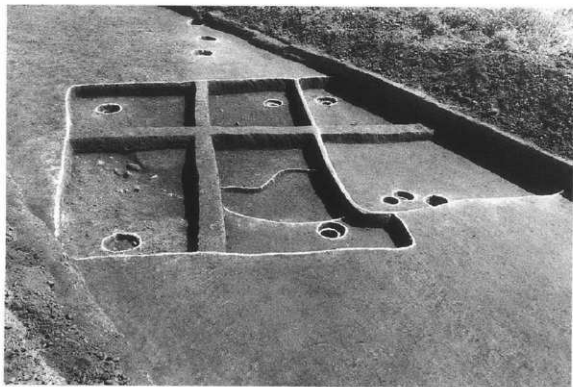


葛籠南遺跡第3次1T遺構検出状況(南から)

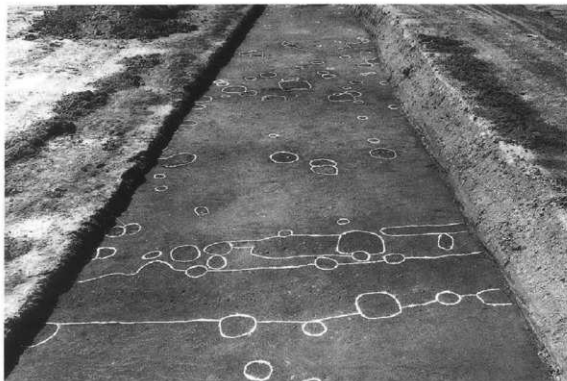




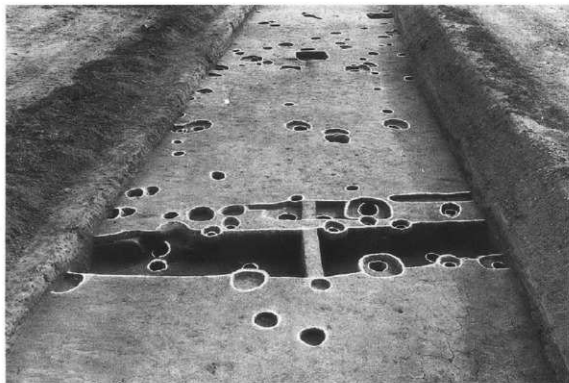
葛籠南遺跡第3次1T遺構掘り込み状況（北から）



葛籠南遺跡第3次1T遺構掘り込み状況（南から）



葛籠南遺跡第3次2T遺構検出状況(北から)



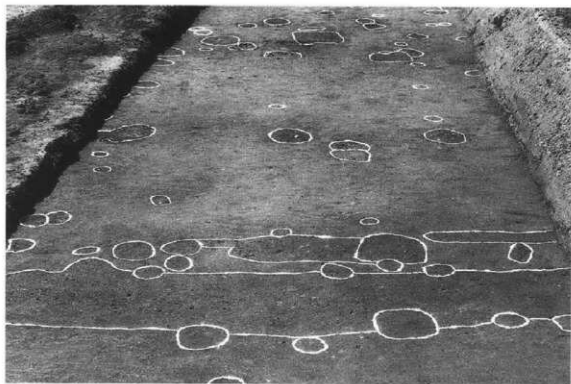
葛籠南遺跡第3次2T遺構掘り込み状況(北から)



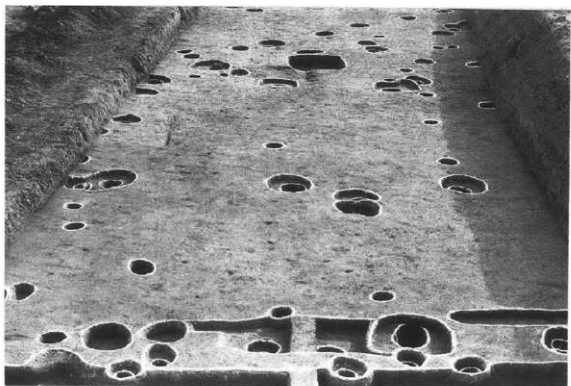
葛籠南遺跡第3次2 T遺構掘り込み状況(南から)



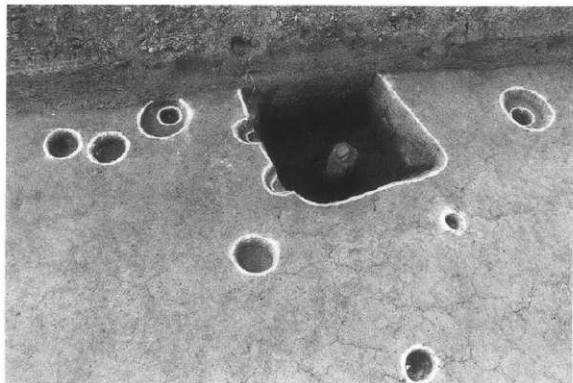
葛籠南遺跡第3次2 TSB-3掘り込み状況



葛籠南遺跡第3次2TSD-1 SB-1 検出状況 (北から)



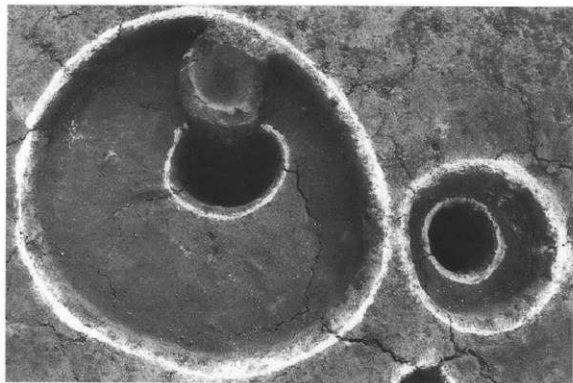
葛籠南遺跡第3次2TSB-1 掘り込み状況 (北から)



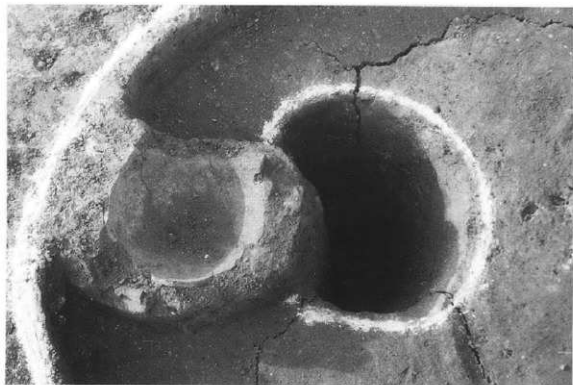
葛籠南遺跡第3次2 T 焼土壇—2



葛籠南遺跡第3次焼土壇—2 遺物出土状況

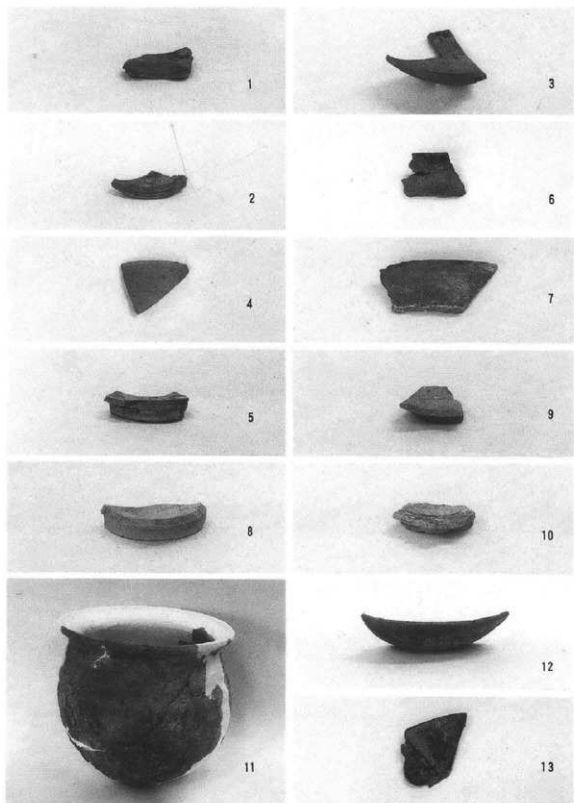


葛籬南遺跡第3次2T P-1



図版14

葛籬南遺跡第3次2T P-1 土器出土状況



图版15 葛籛南遺跡第3次出土遺物

